

下町マガジン

五色桜を守る人たち

第四回



連載シリーズ「下町マガジン」注目のこの人々」今回のシリーズでは足立区で五色桜を守る人たちに注目してみました。

その前に五色桜と言う名称からお話します。五色桜は品種名ではありません。旧荒川堤には、ソメイヨシノ(染井吉野)ムラサキザクラ(紫桜)カンザン(関山)シロタエ(白妙)ウコン(鬱金)スミソメ(墨染)をはじめとして、78品種3000本の里ザクラが植えられていました。その花の色は濃い紅色・淡い紅色・白色・黄色など様々な色の花が咲いた風景は五彩の雲が棚引くようで、いつしか五色桜と呼ばれるようになりました。

始まりは日本文化が大きく発展した江戸時代、大名屋敷では250種類のリザクラが栽培されていたと言われています。この江戸文化の花「里ザクラ」は明治19年南足立郡(現在の足立区江北、鹿浜、谷在家、加賀、血沼、沼田、押部地区)の人々の手により、氾濫する荒川堤の補強を兼ね、約6キロにわたり植樹されました。

その後、荒川堤の改修や公害など時代と共にその本数は激減しました。その一方で五色桜を存続させようと地元の人々や有識者たちの手により五色桜は守られてきました。

そして現在も五色桜を守るために、多くの地元の方々が活躍されています。NPO法人五色桜の会理事長の井口信昭さん(冒頭写真右)もその一人です。井口さんは南足立郡江北村の人々の手によって生まれた里桜の並木「五色桜」と花を愛した先人の偉業を顕彰し、語り継ぐための活動を行っています。

同じくNPO法人五色桜の会副理事長の近藤直子さん(冒頭写真右から2番目)も旧荒川堤の跡に住まれ、合唱指揮者しながら五色桜を見守っています。

先月行われた五色桜マラソン(写真下)もその活動の一つです。NPO法人五色桜の会も主催者として参画し、今年は井口さんが実行委員長を行いました。

(大会会長は東京市長・尾崎行雄の孫の原 不二子氏)



4月22日(日)荒川河川敷で行われたあだち五色桜マラソン大会の様子

その「あだち五色桜マラソン」の席で見かけたのが五色桜という名の日本酒です。こちらは東屋本店(足立区江北2-46-13)で販売しています。



本醸造五色桜と吟醸五色桜荒川堤
販売：東屋本店
足立区江北 2-46-13
Tel.3899-1919

東屋本店は創業250年の老舗酒屋です。

店主の清水幸蔵さん(冒頭写真右から4番目)は現在七代目、お店は店主の清水さんと八代目の息子さん(冒頭写真右から3番目)を中心に切り盛りしています。取材中、小さなお子さんを見かけましたが、九代目の(冒頭写真右から5番目)も誕生していました。

清水さんも五色桜を守り続ける一人です。



お店の前には数多くの桜の木が清水さんの手により植樹されています。(写真右)

話をお伺いすると、東屋本店前の道路は旧荒川堤の跡地(写真上)だと伺いました。道路沿いは現在公園になり、多品種の桜が植えられています。

桜の見ごろは三月中旬の寒緋桜を皮切りに、四月下旬の関山桜の時期まで一ヶ月半ほど桜を見ることが出来ます。



経済の発展に伴い区画整備も進み、地域を見守り続けて来た樹木の伐採を避けることは出来ませんが、こうして地域の文化を守り続けている人たちがいます。

最後に大正時代に撮影した東屋本店さんの写真を紹介します。(写真下)

九代目も誕生し、東屋本店が先祖父代々守ってきた伝統も、これから百年、二百年先まで守り続けて行かれることでしょう。



訂正とお詫ひ
先月号の2面冒頭記事を紹介したの記事にて「岩手県石巻市出身」と掲載されていましたが、正しくは「宮城県石巻市出身」でした。ここに訂正し、お詫ひ申し上げます。